宮崎大学教育文化学部紀要　社会科学　第16号（2007）1－26頁

高齢社会と地域コミュニティ　その２

－子ども会活動の実態と地域コミュニティとの関係－

戸島　信一

Aging Society and Community No.2

－Research of Kodomo-kai Movement in Miyazaki City and Community－

Shinichi TOSHIMA

問題意識と課題

本稿は地域コミュニティに関する研究の一環であり、地域コミュニティを構成する組織である子ども会活動の実態調査に基づく研究である。前稿の宮崎市内の老人クラブの活動実態調査を基にした論稿に続き、今回は地域コミュニティの重要な構成団体であり、いわば少子高齢社会問題の対極に位置する子ども会活動について実態調査をもとに、子ども会活動と地域コミュニティについて考察する。

子どもは地域社会の中で未来の地域の担い手であると共に、その存在自体が地域を和ませ、人々を結びつける極めて重要な存在である。しかし、近年少子化が進行するとともに、子どもをめぐる環境も大きく変化し、地域社会の中での、子ども達の存在は極めて薄いものになっている。一方で近年子どもが犯罪の被害者になるという痛ましい事件が頻発している。そこで「地域で子育て」という視点から、具体的にそれを実践している「子ども会」活動の実態調査をもとに、その活動の現状を把握し、問題点を明らかにし、今後の課題について考察することにする。子ども会は戦後組織された地域コミュニティの１組織であるが、全国組織は１９６５年に結成された社団法人全国子ども会連合会（略称全子連）である。その会員数は１９８２年の８３５万人をピークに、近年は４百万人台に減少してきた。全子連を中心に研修会・研究会が開催されてきたが、残念ながら子ども会についての研究蓄積は少ない。２００３年に結成された全国子ども会研究会を発展させて、子ども会学会が設立されたのは２００５年２月である。

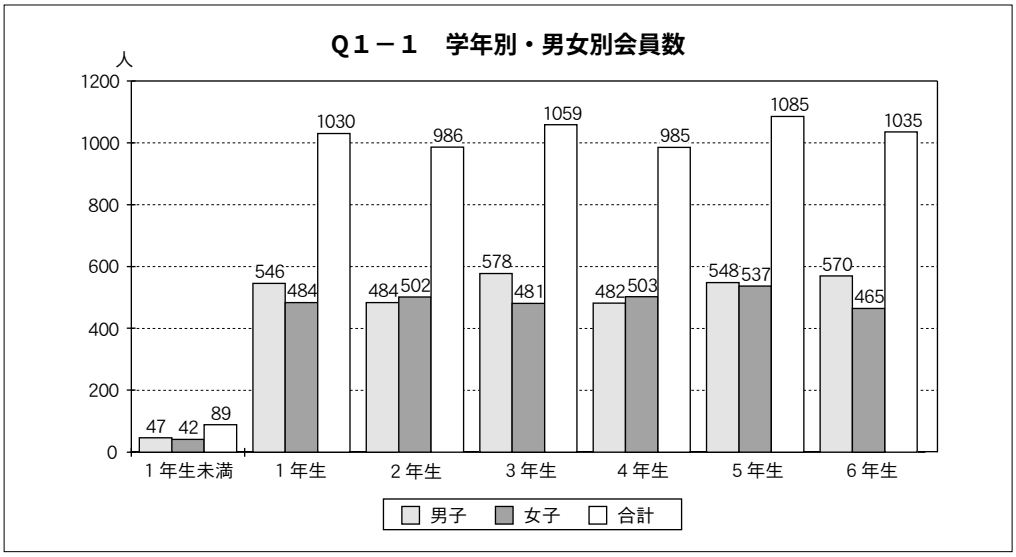
今回の調査対象は宮崎市内の子ども会組織である。調査は平成１７（２００５）年１２月に宮崎市子ども会育成連絡協議会（略称：市子連、長秋美会長）のご協力を得て、まず市子連に加盟している市内３０校区の子連会長さんへ郵送で調査票と調査のお願いの手紙を配布し、そこから各単位の子ども育成会の会長さんに調査票を配付してもらうという、２段階で調査を依頼し実施した。調査票の回収は単位組織の会長さんから直接郵送で大学に送ってもらうという形を取った。

市内３０の校区子連、単位組織３０１に対して調査票を回収できたのは、１３７件で回収率

４６％であった。この内、回収が全く出来なかった組織が５校区、５９単位組織あったので、この校区では何らかの事情があって、単位子ども会の会長さんに調査票が渡っていないものと思われる。したがって、調査票が実際配布されたのは２４２組織で、そのうちの回収数１３７ということで回収率は５７％ということになる。子ども育成会の会長さんは、自分自身の子育てや仕事で忙しい世代であり、調査への協力も難しく回収が難しいことはある程度予想していた。そういうことでこの回収率は、ほぼ予想範囲内の水準である。特筆すべきは調査票の自由書き込み欄に多くの意見や要望が熱心に書かれており、子ども会の活動に対する興味や関心が極めて高いことを感じた。

１．子ども会組織の会員数

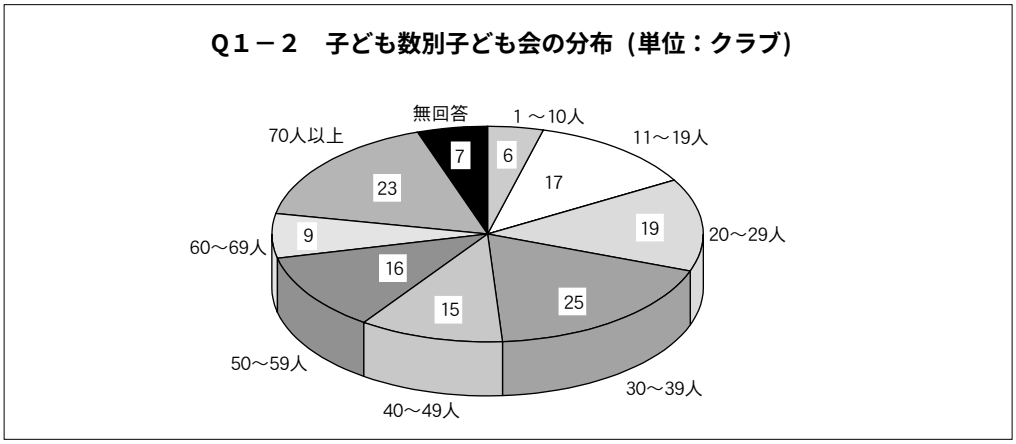
１－１　学年別合計



まず、最初に子ども会の会員数を尋ねた。学年別・男女別のデータがきちんと記入されていたのは１３０の単位組織であった。子ども会の構成員は小学生が基本であるが、小学生になっていなくても加入できる。１年生未満の加入者がいる組織は１８組織（１４％）で会員数は８９名で、１組織あたり５人弱である。兄姉が会員になっているとき、親はその弟妹の幼児も一緒に行動できなければ活動に参加しにくい。その意味で１年生未満の子も地域の子ども会活動に参加出来るような組織にすることは親の立場からすれば良い試みである。まだそのような組織は、多くはないが、今後広がっていけば、親にとっても子どもにとっても有意義である。

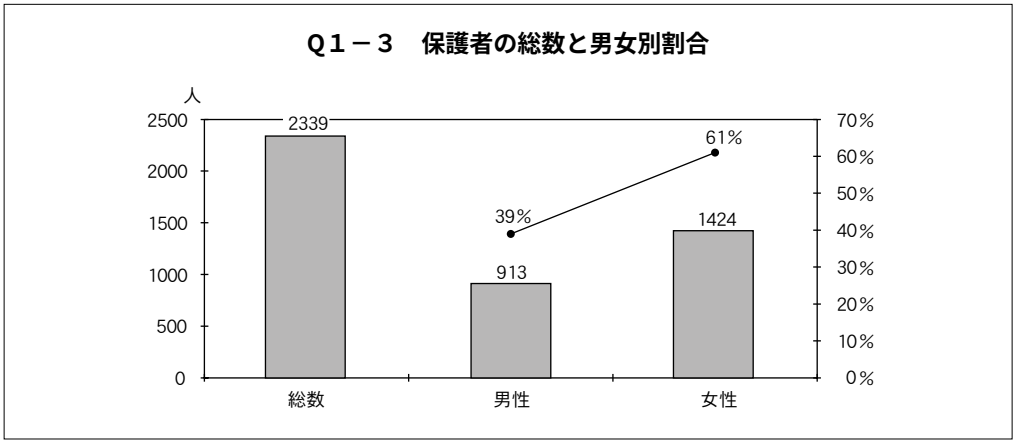
会員の学年別構成は、低学年、高学年での差はない。男女別にもそれほど差はない。市子連によれば、市内３５の小学校区で、市子連に加入している子ども会がないのが（全く活動していないわけではなく、独自に活動しているものと思われる）５校区ある。加入している校区の児童の組織率は、９５％以上が１５校区、９０～９４％が４校区、８０～８９％が３校区、７０～７９％が２校区、６０～６９％が３校区、５０％未満が３校区といった構成である。近年都市部では地域の自治会組織に加入しない世帯が増えているが、子ども会にも加入しない世帯が増えていることになる。

１－２　子ども数別子ども会の分布



さらに少子化によって、単位組織の子ども数が気になったので、それを集計してみると、平均では１組織当たり４８人ということになるが、最も多いのが３０～３９人の組織（１８％）で、次いで７０人以上が２３組織（１７％）で、２０～２９人の１９組織（１４％）の順である。１０人以下が６組織（４％）、１１～１９人が１７組織（１２％）と小規模の子ども会もあり、６割近くが５０人未満の組織である。少子化は子ども会の組織活動にも影響を与えていると判断できる。

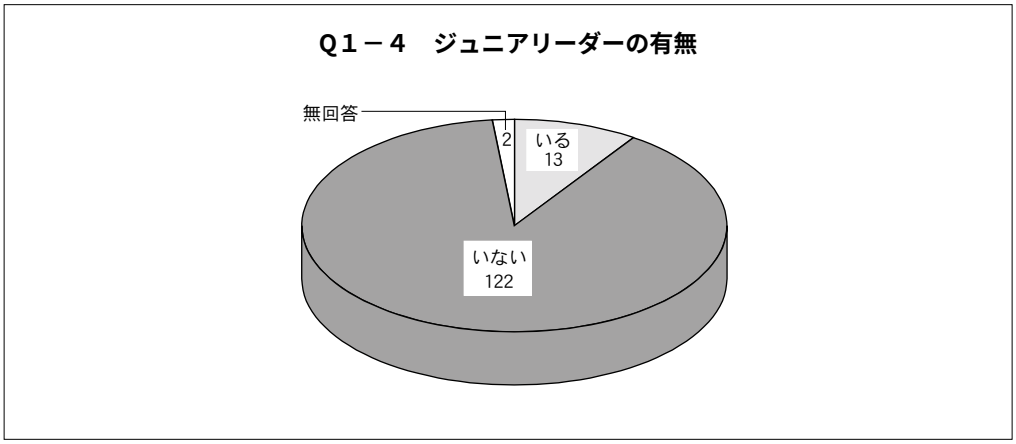
１－３　保護者の総数と男女別割合



保護者は子ども会の育成という立場で活動に参加しているが、その数を聞いたところ、はっきり把握されていない組織が多く、回答があったのが８０組織で５８％にとどまった。

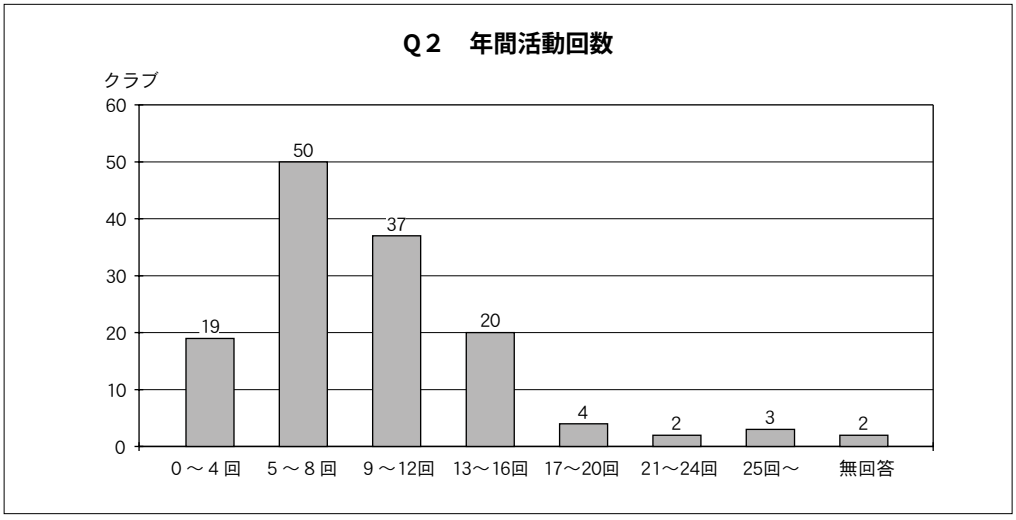
男女別では、女性（母親）が６１％を占めている。後の質問で明らかになるが、保護者の協力を得ることが年々難しくなってきており、活動展開上の大きな問題点である。

１－４　ジュニアリーダーの有無



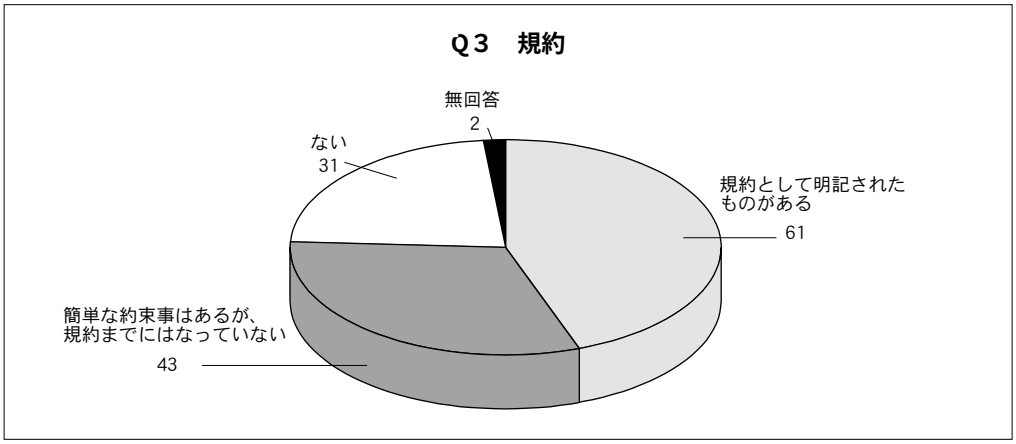
全国の子ども会活動では、その先輩世代である中学生や高校生の協力を得る取り組みが進められている。彼らをジュニアリーダーと呼んでいる。宮崎市内の子ども会でそのジュニアリーダーの存在を聴いたら、「いる」という答えは１３組織で９％に過ぎなかった。ジュニアリーダーの構成は、中学生がいるのが９組織で延べ２６人、内１人のところが２組織、２人が４組織、３人が１組織、５人が１組織で、１３人が１組織である。高校生がいるのは５組織で、１人が４組織、５人が１組織である。

２．子ども会の年間活動回数



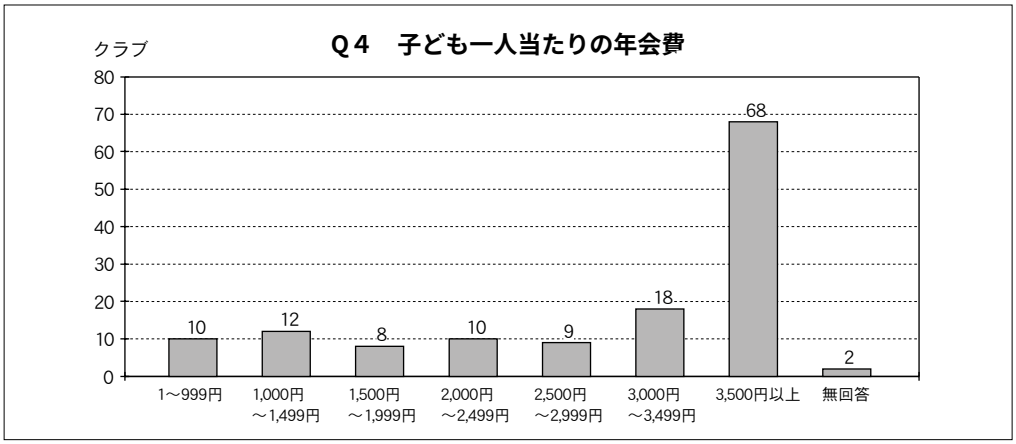
子ども会の活動が１年間にどれくらい行われているかを調べてみた。最も多かったのが５～８回で５０組織３６％であり、９～１２回が３７組織２７％、１３～１６回が２０組織１５％であった。一方で４回以下が１９組織１４％存在している。１７回以上の極めて活発な活動を展開しているのは９組織で７％である。

３．子ども会規約の有無



子ども会や、育成会の活動の社会的広がりや持続性を考えるとき、規約の有無が気になる。そこで規約の存在について質問してみた。「明記されたものがある」と答えたのは６１組織４５％であり、「簡単な約束ごとに程度」のものがあるというのが４３組織で３１％、「ない」と答えた組織は３１組織で２３％であった。無回答も存在を知らないと思われるので、明確な規約に則った活動を展開している組織は意外に少なく、半分以下ということになる。総会の開催や会計の処理（監査）などの細かいところは聴いていないが、組織運営上は問題を持っている組織が多いのではないかと推測できる。後で見るように、会長はほとんど任期１年で、次々に交代するシステムである。会長のほとんどが女性（母親）であり、仕事を持つ母親が増加していることから、慌ただしい日々の中で子ども会活動を遂行している状況であり、あまり考えずに活動が行われているのが実態であろう。しかし、組織活動の持続性のためにはやはり規約を制定することが必要であろう。

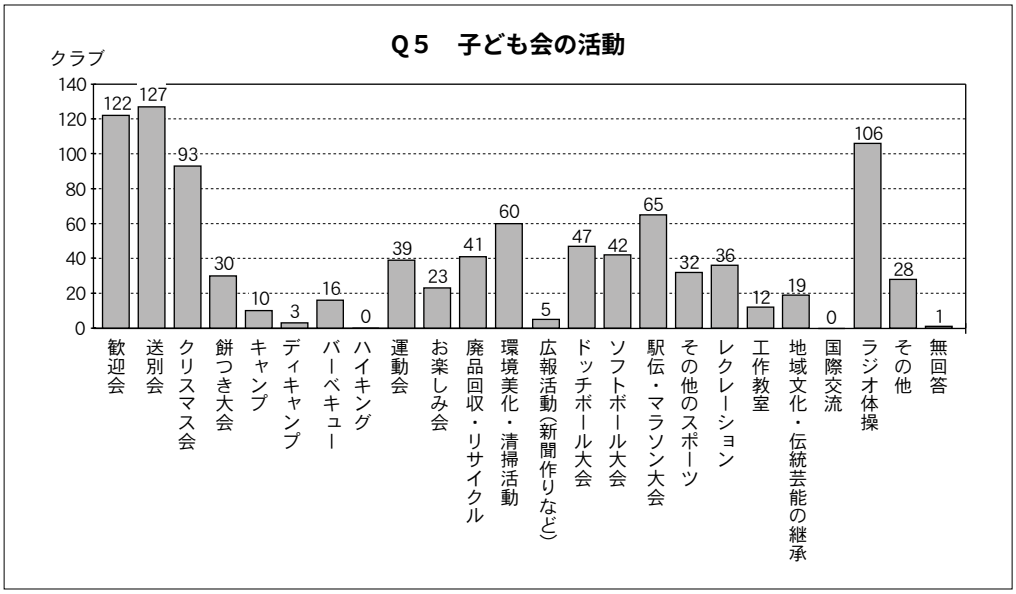
４．子ども会の年会費



どれくらいの会費で活動を行っているかを尋ねたところ、年会費3,500円以上が最も多く６８組織でほぼ半分であった。これは予想以上に高く、子ども数の減少も影響していると思わ

れるが、判断が甘く回答項目の選択ミスをまねいた。次が3,000～3,499円で１８組織（１３％)、1,000～1499円が１２組織（９％）の順である。2,500円未満の比較的安い会費でやりくりしている組織が４０組織で２９％ある一方で、それ以上が９５組織、６９％でその倍以上あることになる。このように会費面から見れば高いところと、安いところがあり、会費の額がかなりまちまちであるということは驚きであった。おそらく地域の自治会組織からの経済的支援の程度が影響しているのであろう。

５．子ども会の活動内容



では具体的には子ども会の活動としてどのようなものが行われているかを尋ねた。最も多いのが「送別会」で１２７組織、９３％の子ども会で実施されていることになる。小学校の卒業は、同時に子ども会のから卒業でもあり、子どもの成長の大きなステップであり、多くの組織で取り組まれているのであろう。次が「歓迎会」で１２２組織、８９％で取り組まれている。こちらは新しいメンバーを迎える行事であり、やはり多くの組織で取り組まれている。３番目は「ラジオ体操」であり１０６組織、７７％で実施されている。夏休みのラジオ体操は子ども会組織を中心に取り組まれていることがわかる。４番目が「クリスマス会」であり、９３組織、６８％であり、本来はキリスト教の宗教行事であるはずであるが、我が国ではキリスト教徒は少ないのに地域の子ども達のための楽しい行事として行われていることになる。

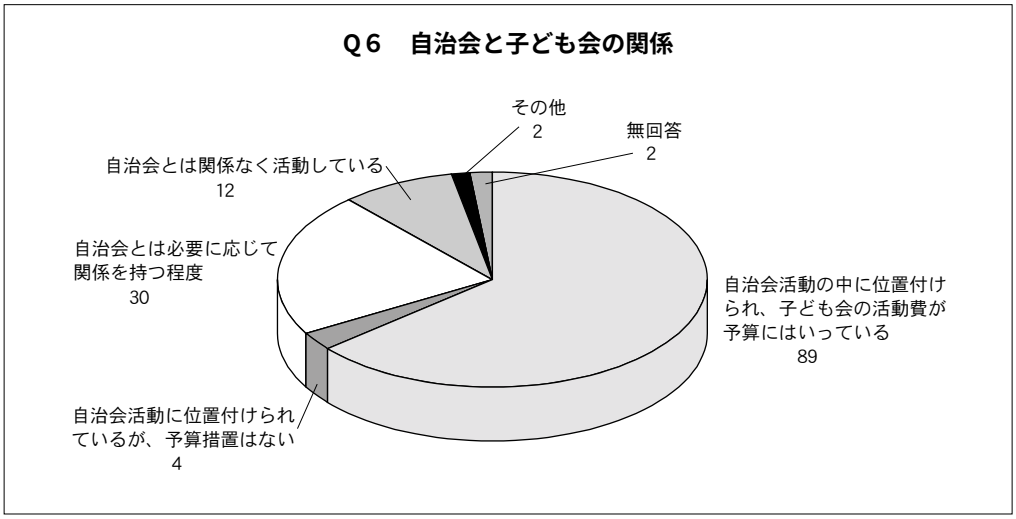
それ以下は５０％を割ることになり、半分以下の組織でしか取り組まれていないことになるが、５番目が「駅伝・マラソン大会」であり６５組織、４７％と約半分の参加ということになる。少年・少女のスポーツ活動として野球やサッカー、バレーのクラブが存在するが、駅伝・マラソンはその各スポーツ分野の共通項として取り組まれている。また単位子ども会の対抗戦でもあり活動としても盛り上がるところであるが、少子化の影響でメンバーを揃えることが困難になり、駅伝への参加チームが減少しており、参加率の低下を招いていると考えられる。６番目が「環境美化・清掃活動」で６０組織、４４％である。地域環境の変化にも影響される

が、後で考察するように、子どもにとっては不人気であり、以前に比べてかなり参加が減っているのではないかと考えられる。

７番目が「ドッヂボール大会」４７組織、３４％、８番目が「ソフトボール大会」で４２組織、３１％である。駅伝大会と並び子ども会の対抗戦として実施されているが、やはり子ども数の影響や、他の少年・少女スポーツとの競合もあり参加が１／３程度になっていることになる。以下「廃品回収・リサイクルへ」の取り組みが４１組織で３０％、「運動会」が３９組織で２８％、「レクレーション」が３６組織で２６％、「その他のスポーツ」(キックベースボールやミニバレー等) が３２組織で２３％、「餅つき大会」が３０組織で２２％、「お楽しみ会」(室内レクレーション) が２３組織１７％、「地域文化・伝統芸能の継承」が１９組織１４％、「バーベキュー」が１６組織１２％、「工作教室」１２組織９％、「キャンプ」１０組織７％、ということになる。

その他として出された取り組みは、「段ボールキャンプ」、「地域の夏祭り参加」、「みこしかつぎ」、「敬老の日」、「球技大会」、「砂の造形」、「みかん狩り」、「火の用心」、「夏祭り」、「レクレーション」、「盆踊り大会」、「網引き大会」、「地区パトロール」、「安全立ち番」、「公民館文化祭」、「神社みこし」、「ふるさと祭り」、「観月会」、「十五夜網引き」、「陶芸教室」、であった。地域の祭り関係への参加は先の地域文化・伝統芸能の継承と合わせると２８組織になるがそれでも２０％程度にとどまり、地域のイベントの中での子ども達の存在価値はかなり低下しているものと考えられる。地域の中での子ども達の出番を作っていくことが、子ども達の地域への愛着を形成し、また大人と子どものコミュニケーションも生まれ、地域内の人間関係の形成に繋がるのではないかと思う。そのことが地域の安全・安心を形成することになる。

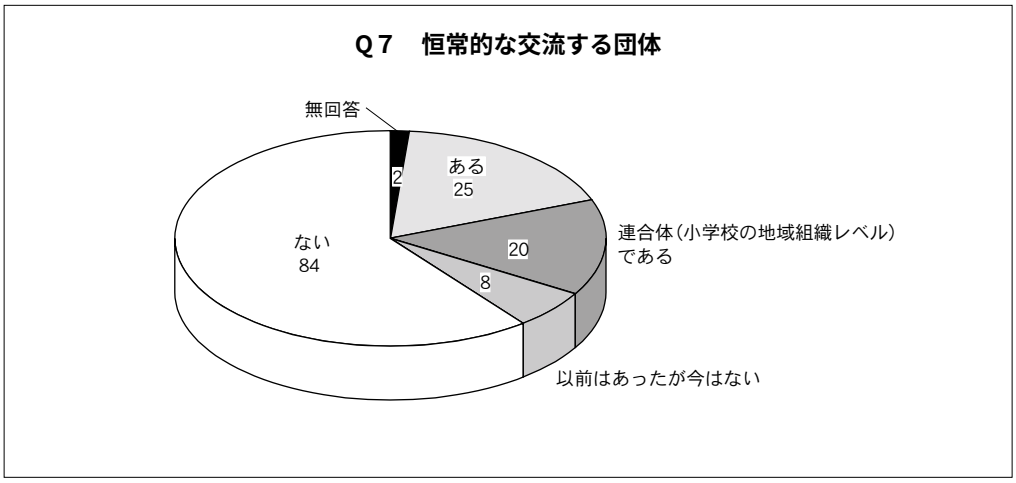
６．自治会と子ども会の関係



地域コミュニティ組織の中で、包括的役割を果たしているのが自治会である。基本的に自治会は自主的に形成され、自主的に運営される組織であるが、我が国では全国津々浦々に形成されている。自主的組織ではあるが、一方で行政の末端組織的性格も持っている。その自治会組織はいくつかの部会を持っている。老人会や、婦人会（女性会）などであるが、子ども会（育

成会）も重要な構成メンバーである。自治会と子ども会の関係を質問してみると、８９組織、６５％が「自治会活動の中に位置付けられ、子ども会の活動費が予算に入っている」と答えている。「自治会活動に位置づけられているが予算措置はない」は４組織、３％である。つまり、自治会活動の一環として子ども会活動が位置づけられているのは全体の６８％ということになる。「自治会とは必要に応じて関係を持つ程度」が３０組織２２％、さらに、「自治会とは関係なく活動している」のが１２組織、９％ある。その他や、無回答は子ども会の活動展開上少なくとも目に見える形での自治会の存在を確認していないと思われるので、自治会の予算措置がない子ども会は全体の３６％に達するものと判断される。先に見たように子ども会の会費は多様であったが、少なくとも地域コミュニティの構成メンバーとして子ども会をしっかり位置づけ、予算措置をすることが重要ではないかと考えられる。自治会とは関係なく、子ども会が自主的に活動を展開できて行ければそれはそれで良いかもしれない。しかし、最近活動費が乏しい子ども会が多く、会費も高くなってきているように思われる。自治会に加入していない世帯も増える傾向にあり、また子ども会には加入していても自治会に加入していない世帯もあるようだ。さらに子どもを持ちながら両方とも未加入の世帯もかなり存在しているらしい。確かに両方とも自主的な組織であるが、地域コミュニティの形成、子ども達を育てる地域の社会環境を考えると、組織化には意識的取り組みが必要になってきていると思われる。

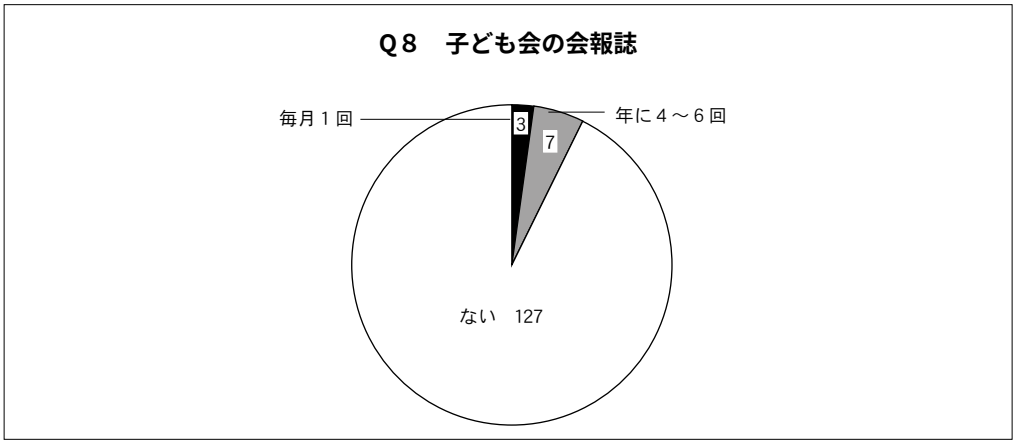
７．恒常的に交流する団体の有無



子ども会組織が日常的に交流する団体を持っているかどうかを尋ねたところ、単位組織で「ある」と答えたのは２５組織、１８％であった。小学校（連合体）レベルでの交流があるのが、２０組織で１５％で合わせて、３３％であり約１／３である。

「ない」という組織は９２組織で、６７％である。この内８組織、６％が「以前はあったが今はない」と答えており、子ども会の活動の困難性の高まりと一方でかつて子ども会との交流があった青年団や老人会など他の団体の活動力量の低下も影響しているものと思われる。後で見るように核家族化の深化の中で、異世代との交流の場として子ども会活動に期待する傾向がある。その意味で、もっと地域コミュティを構成する諸団体相互の交流が図られる必要がある。

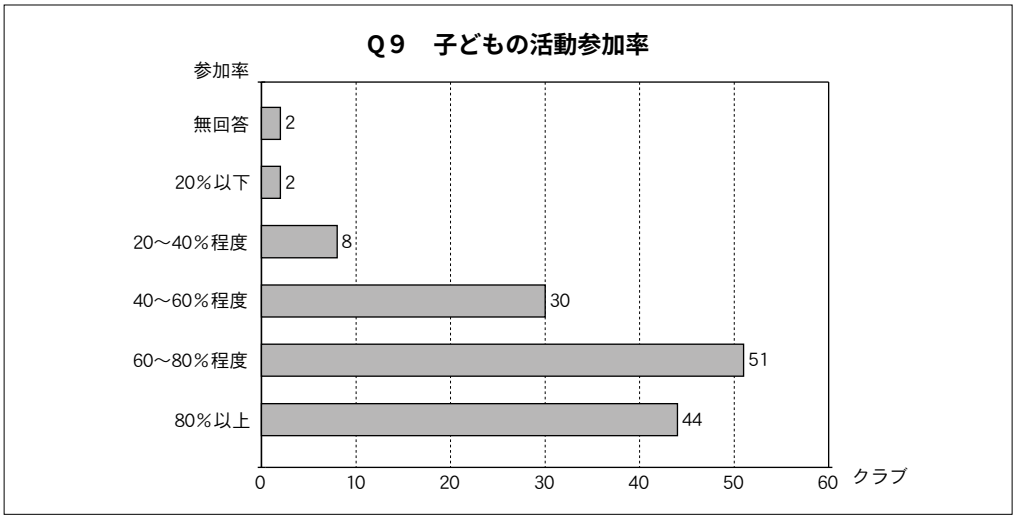
８．子ども会の会報誌



子ども会組織にとって、交流や連絡のための会報誌の存在が重要であると思われるが、残念ながらそのようなことにまで活動の手が及ぶ組織は少ない。会報誌が「ない」という組織が１２７組織、９３％と圧倒的である。「ある」というのが１０組織で、７％であり、そのうち毎月会報を発行して頑張っている組織が３、２～３ヶ月に１回（年４～７回）という組織が７である。

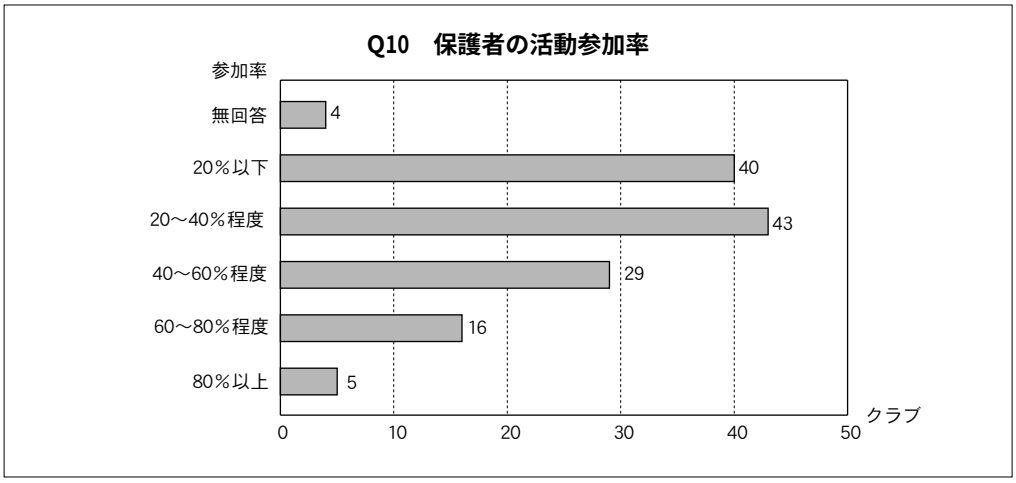
自治会レベルでの会報誌が発行されているのがどれほどあるかわからないが、子ども会だけで無理ならば自治会レベルの取り組みの中で実現できるように考えたら良いであろう。パソコンの普及で文書が簡単に作成できるようになっており、ＩＴ機器を利用した連絡や交流が図れれば活動の活性化に役立つかもしれない。しかし、一方でやはり地域コミュニティはフェイス ツー フェイスという関係が大切であることを考えるならば、時間や無駄を省くという面で補助的に使えばいい。

９．子ども会活動への子どもの活動参加率



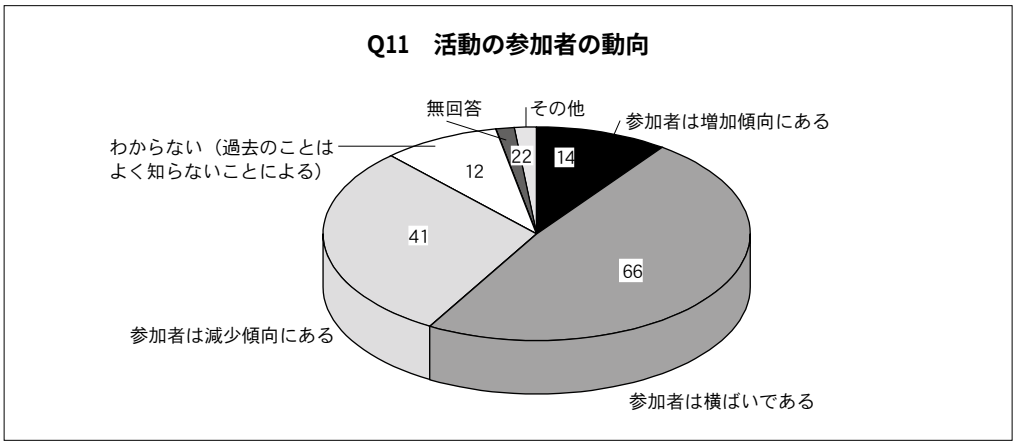
子ども会活動への参加状況について質問してみた。子ども達の参加は、「６０～８０％程度」の参加が最も多く、５１組織で３７％である。次いで「８０％以上」の参加があるのが４４組織で３２％である。「４０～６０％」の半分前後の参加のある組織は３０組織で、２２％である。「２０～４０％」の組織は８で、６％、「２０％以下」が２組織、１％ということになる。６０％以上の参加の組織が全体の６９％を占める一方で、参加率の低い組織もほぼ３割あり、会員数の減少と参加率の低下という２重の困難さを抱えていると判断して良い。

10．保護者の参加率



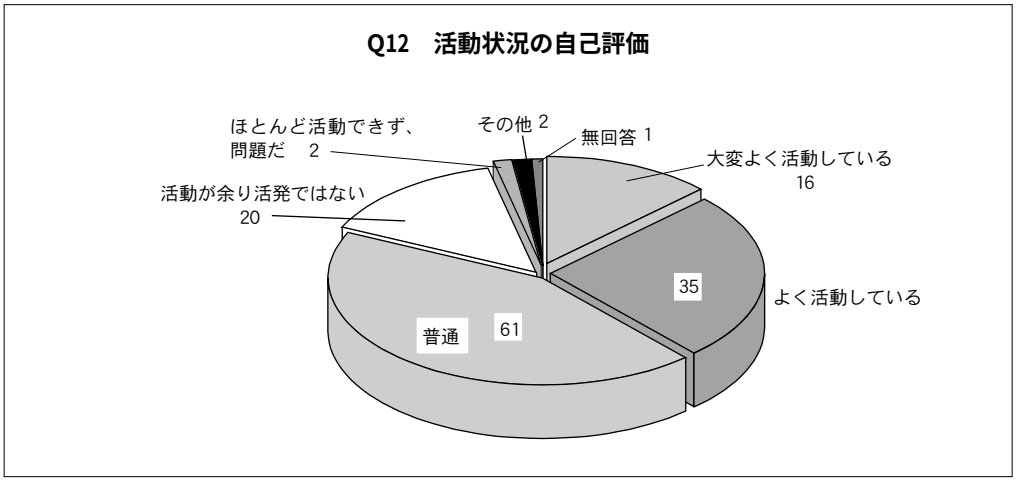
一方で保護者の方の参加状況も尋ねてみた。最も多いのが「２０～４０％程度」の参加で、４３組織、３１％、次いで「２０％以下」で４０組織、２９％であり、この２つで６割になってしまう。「６０％以上」の保護者が参加するのは２１組織、全体の１５％にとどまっている。共働きの一般化の中で、土曜日曜の行事などへの参加は、子ども会活動の意義を理解し、意識的に取り組む保護者でない限り、役員任せになっており参加する人は少ないと判断できる。

11．活動の参加者の動向



子ども会活動への参加者の動向は、「増加傾向にある」が１４組織で１０％、「参加者は横ばいである」が６６組織４８％である。過半数は現状維持か、増加傾向ということになる。しかし、一方で「参加者は減少傾向にある」が４１組織３０％、また「わからない」が１２組織９％ある。これは会長が１年交代でなされる場合が大多数であるため、長期的傾向が判断できないためと思われる。全体としては増加傾向より減少傾向の流れの中にあると判断できる。学校週休２日制が定着し、子ども達が家庭や地域で過ごす時間が増え、地域で子ども達を育てるという可能性は増えたのであるが、それを生かして活動を活発にすることにはなっていないと判断される。

12．活動状況の評価



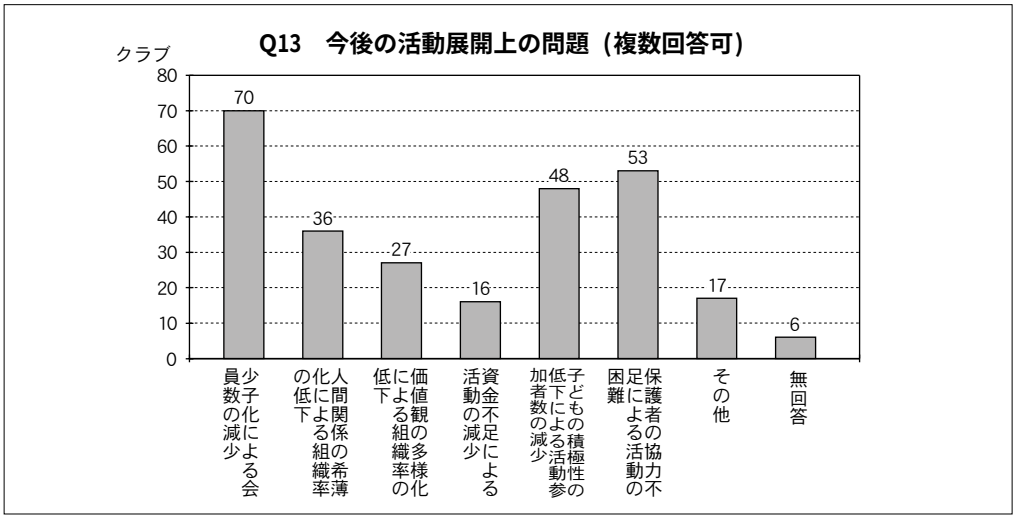
次に、そのような子ども会活動を会長さん達はどのように評価しているかを尋ねた。

「普通」という答えが最も多く６１組織、４５％である。次が「よく活動している」で３５組織２６％であり、その逆の「活動が余り活発ではない」は２０組織、１５％である。

「大変よく活動している」は１６組織で１２％、「ほとんど活動できず問題だ」は２組織、１％にとどまった。全体として状況は悪化し、困難になっている中で、活動している人たちは、よく頑張っていると評価している。その他として以下の意見が寄せられている。「他の子供会によるとよく活動しているといわれるが、私としては面白くない。」「もっと縦のつながりを利用して、いろいろな活動をしたいが、保護者の協力が少ないため、例年通りの行事の消化に他ならないため、物足りないと思う。」

このように、会長としてはもっと子ども達のためにやりたいことはいっぱいありながらも、なかなか実現できず、忸怩たる思いを持っている人が多いと判断できる。

13．今後の展開上の問題（複数回答可）

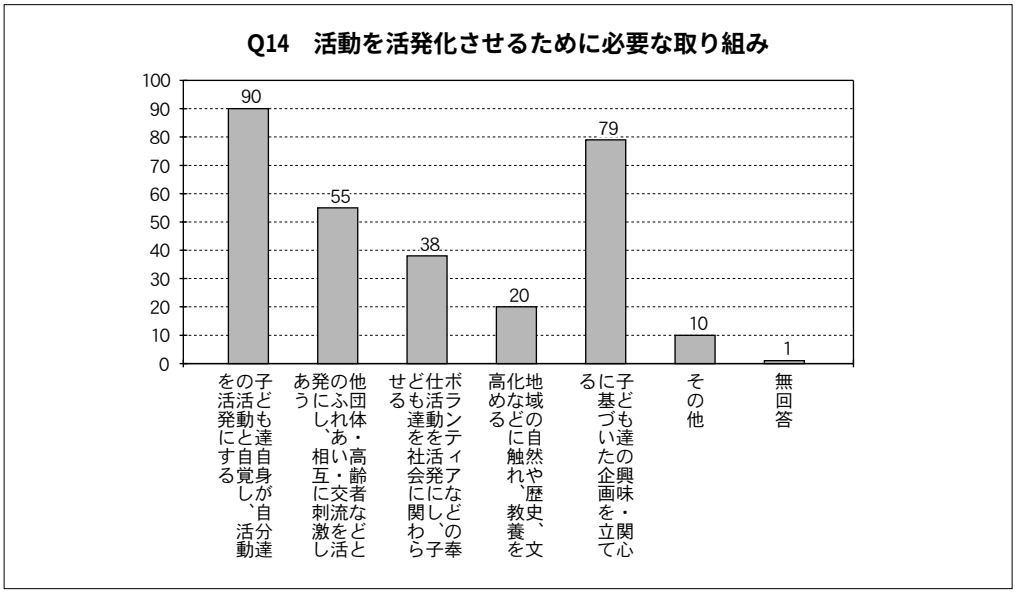


それでは、今後の子ども会活動の展開の上で、何が問題かということを尋ねてみた。最も多いのが「少子化による会員数の減少」で７０組織、回答率５１％である。子ども会としてはやはり一定の数がいなければ活動が難しいということであろう。子どもの数が減るということはやはり地域コミュニティにとっては大きな痛手であり、活動していても張りがなく、元気が出なくなるということであろう。次に「保護者の協力不足による活動の困難」が５３組織、３９％である。親世代も競争社会、格差社会といわれる時代になり、雇用構造や働き方も多様化しており、活動に参加したくてもなかなか出来ないということが背景にあると考えられる。その次が「子どもの積極性の低下による活動参加者数の減少」で４８組織、３５％である。本来子ども会とは「子どもによる運営」を基本にしていたはずである。私の子どもの頃は、出来ることは自分たちで決め実行していた。最近は、子ども同士のコミュニケーション力が低下し、上級生のレーダーシップも形成されにくくなっている。また社会の変化で子ども達だけで行動することも困難になってきている。従って親たちのサポートなしには活動できなくなっているが、可能な限り子ども達の自主性を引き出す必要はある。主体性・自主性をどう形成させるかが大きな問題である。さらに「人間形成の希薄化による組織率の低下」が３６組織、２６％、「価値観の多様化による組織率の低下」が２７組織、２０％と続く。これらは、都市化社会の進行など時代の変化によって生まれた問題である。地域社会の中で、子ども会組織をどのような組織と考え運営していくのか組織の原点が問われる問題である。「資金不足による活動の減少」も１６、１２％の組織で挙げられている。

その他として挙げられていたのは、以下の通りである。

「母親の仕事と両立と活動の負担」「子どもの数が少ない、脱会者、未加入者もある」「親が協力できない、役員になるのがいやという理由から、子どもが、入りたくても入れない状況にあることが多い」「土日の活動は、スポーツ少年団などの活動と重複し、参加できない」「子どもの減少により団体活動が困難」「会の活動を見直す必要性がある。役員の仕事を軽減すべき」「団地が高齢化し、子どもの人数が減少」「子どもが計画するのではなく、親の役員で行事を計画し、運営している」

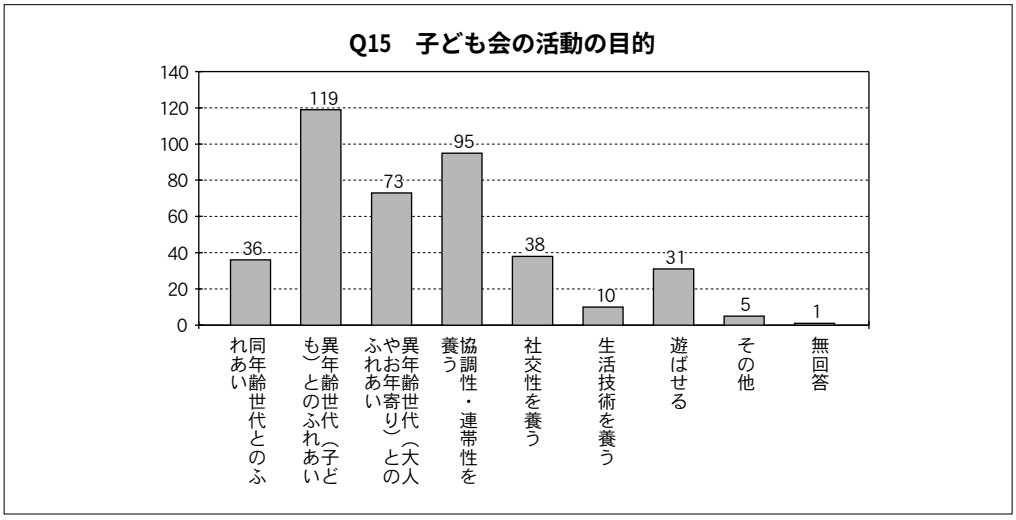
14．活動を活発化させるために必要な取り組み



では子ども会の活動を活発にするにはどのような取り組みが必要かを尋ねた。最も多かったのが「子ども達自身が自分たちの活動と自覚し、活動を活発にする」で９０組織、６６％の回答率である。これに続いて「子ども達の興味・関心に基づいた企画をたてる」が７９組織、５８％である。まさに子ども会の基本である「子ども達による、子ども達のための、子ども会活動」をどう展開するかが活動を活発化させる最大の鍵であるということになる。このように親世代が押しつけるのではなく、自分たち自身で決めるのを「待つ」ことが重要なのだが、ほとんどの活動が今までの活動を踏襲するものになっているので、子ども達が決めるというチャンスが与えられていないところに大きな問題があるように思われる。この２つがずば抜けて多いが、３番目が「他団体・高齢者などとのふれあい、交流を活発にし、相互に刺激しあう」が５５組織、４０％である。４番目が「ボランティアなどの奉仕活動を活発にし、子ども達を社会に関わらせる」が３８組織で２８％である。また「地域の自然や歴史、文化などに触れ教養を高める」は、２０組織１５％である。このように、具体的な行動によって活発化させるということにも少なからず賛成を得ているが、あくまでも先の２つ、子ども達自身による、子ども達のための活動という点が重視されている。その他に出された意見は、下記の通りである。

「保護者の意識改革が必要、仕事をしている人が多く、土、日はゆっくりしたいという人が多い、私のようにお気軽主婦がやればいいという空気が流れている。楽しい企画をしても却下されることが多い」「学校側からの勧めがあればもっと確実に増員できるように思うが、立場上出来ないらしいので無理とのこと」「子ども会に参加させない親が多いので、その意識を改革させないといけない」「活発化したい気持ちは山々ですが役員は本当に大変です」「保護者も積極的に参加するようにする」「保護者がすべておぜん立てするのではなく、子ども自身に考えさせるような活動が出来るよう工夫する必要がある」「正直子ども会がいるのかどうか疑問です」

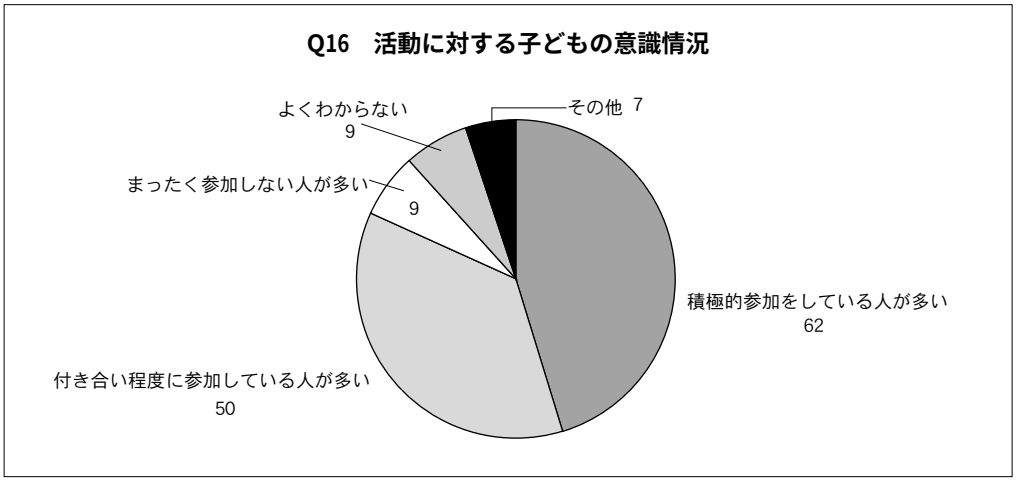
15．子ども会の活動の目的



というわけでそもそも子ども会の活動の目的をどう考えているのかが問題になる。そこで活動の目的について尋ねてみた。最も多いのが「異年齢世代（子ども）とのふれあい」で、１１９組織、８７％という高率である。少子化で、兄弟姉妹の数が減少し子ども同士のふれあいが減少している中で、子ども会活動の一番の特徴は異年齢の子ども達が交流できる場ということにある。２番目が「協調性・連帯性を養う」でこれも９５組織６９％と高い。前者とも関連して、子ども達の他人との接触の場、社会の中で人間関係を形成し社会力を育んでいく場として子ども会活動が考えられている。３番目が「異年齢世代（大人やお年寄り）とのふれあい」であり７３組織で、５３％と過半数である。これは核家族の普遍化の中で、親以外の大人とふれあう機会が減少しており、子ども会活動を通じて、大人やお年寄りとの交流を実現し異世代交流を実現したいとの思いがある。以下「社交性を養う」が３８組織、２８％、「同年齢世代とのふれあい」３６組織、２６％、「遊ばせる」３１組織、２３％、「生活技術を養う」１０組織、７％の順である。

その他として出されていたのは、「同地域子ども間の交流」「子どもを通しての地域の大人同士のふれあい」「学校では出来ない経験をする」「地域の子どもの顔を大人が知る」というものであり、大人自身が子ども会活動を通じて知り合いになったり、地域の子ども達と知り合いになることは重要な点である。私も、子どもが小さい頃は「○○ちゃんの」お父さんとい名前（？）で地域の子ども達に呼ばれていた。「子は鎹」とは夫婦間だけでなく、地域でもいえることである。

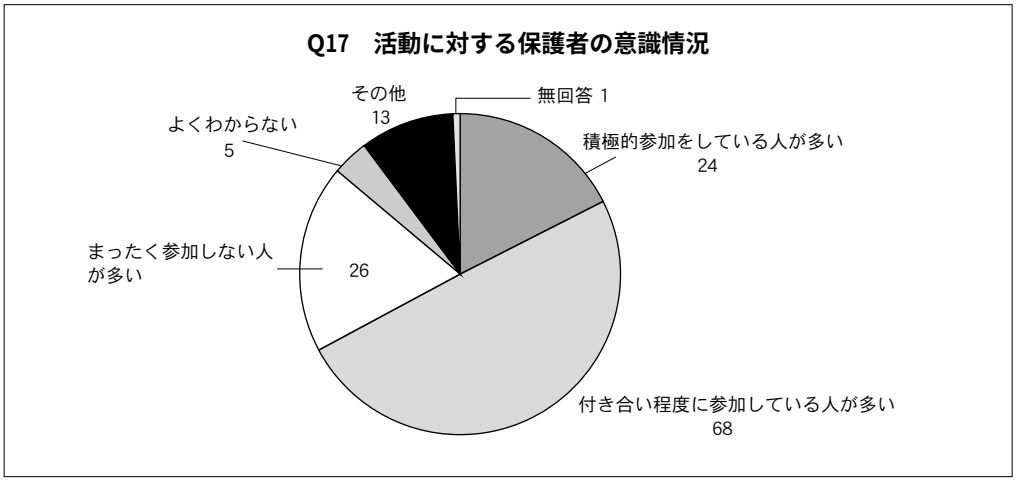
16．子ども会活動への子ども達の意識情況



子ども会活動に対して子ども達はどのような意識で参加しているのかを尋ねてみた。
最も多いのが「積極的に参加している人が多い」で６２組織、４５％である。次いで「付き合い程度に参加している人が多い」で５０組織、３６％であり、どちらかというと子ども達は子ども会の活動を楽しみにして参加して人が多いということなる。ただし「まったく参加しない人が多い」と「よくわからない」がともに９組織、７％、あり、子どもの心をつかむのも容易ではないことを表している。年間行事をこなすだけでなく、子ども達の状況をよく見たり、考えたりする活動が必要なようだ。その他の欄には以下のような意見が出されていた。「クリスマス会など楽しいことは積極的に参加する」「上級生になると習いことが多くなり活動に参加しなくなる」「参加率の多い行事とそうでないものの差がある」「常に参加させる保護者は限定されている、行事によって参加人数の差が大きい」「積極的参加してくれる子とそうでない子の差がある」「ドッチボールや綱引き大会にはよく参加するようですが、ボランティア活動になると参加が少ない。親の意識だと思う」

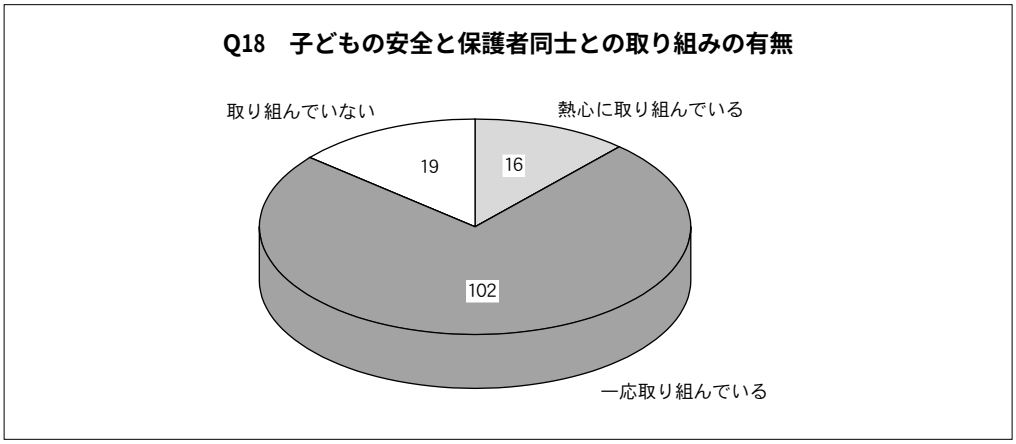
参加者の多いものとそうでないものは、子どもの関心次第であるようだが、だからといっていつも楽しい活動だけを企画すればいいということにはならない。子ども達の社会性や、社会的マナー、忍耐力、あるいは良心というものを養うようなリサイクル、環境美化のような地道な活動も必要である。またスポーツ関係の活動や塾通いなどによって高学年になれば子ども会活動の優先順位が下がる傾向にあるようだ。

17．保護者の意識情況

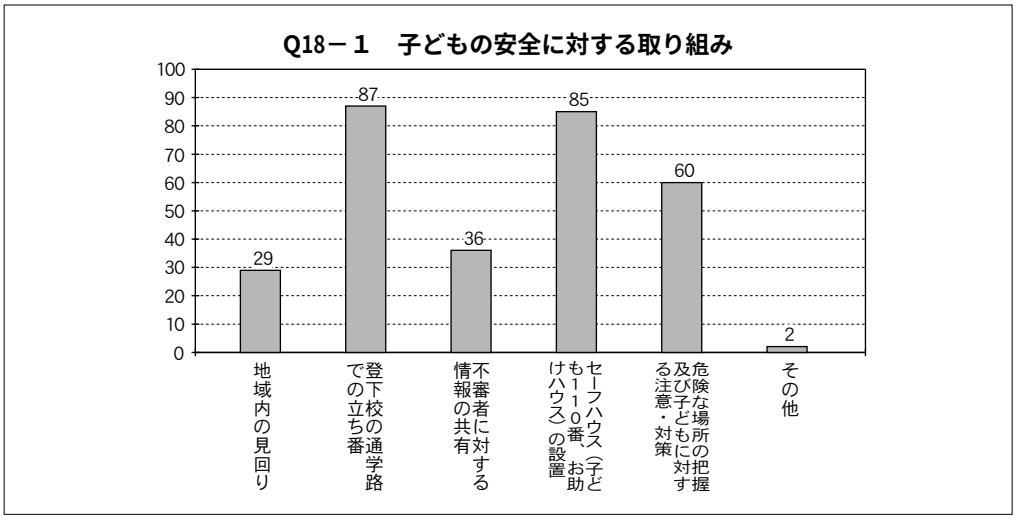


次に保護者の意識について尋ねてみた。こちらは１番多いのが「付き合い程度に参加している人が多い」で６８組織、５０％である。次が「まったく参加しない人が多い」で２６組織、１９％で、「積極的に参加する人が多い」の２４組織、１８％を上回ってしまう。会長さん達の悩みや、苛立ちが見えてくる。その他の欄にはその声が多数書かれていた。「する人はする、協力しない人はまったくしない」「積極的な人とそうでない人との差が大きすぎる．我が地区は夜の仕事の人が多いため、少々頼みづらいこともある」「常に参加させる保護者は限定されている、保護者の一言で参加する子は増えると思う」「行事の担当を決めているので、担当のときはほとんどみんな出てくるが、担当以外は役員のほかは参加しないというか、参加しなくていいと思っているのではないだろうか」「仕事が忙しく参加できない」「役員の方が一所懸命してくれる」「役員に任せになっている」「積極的参加してくれる保護者とそうでない保護者の差がある」「役員の保護者または低学年の保護者のみの参加が多い」「役員しか参加しない」「役員中心」という具合である。役員がローテーションでやられることが多いので、自分が役員の時は参加するが、そうでない時はお休みという感じになってようだ。役員になるのがいやで、子ども会に加入しないという話もある。自分たちの生活環境をよくして行く為には、子どもを介した地域のネットワーク形成と地域社会への参加ということが必要だという理解を、保護者達に意識的に働きかけるべきであろう。都市地域における地域コミュニティの大切さは、阪神・淡路大震災の貴重な教訓である。とりわけ子どもを介しての地域コミュニティの形成は極めて重要である。

18．子どもの安全に関する地域や保護者同士での取り組み

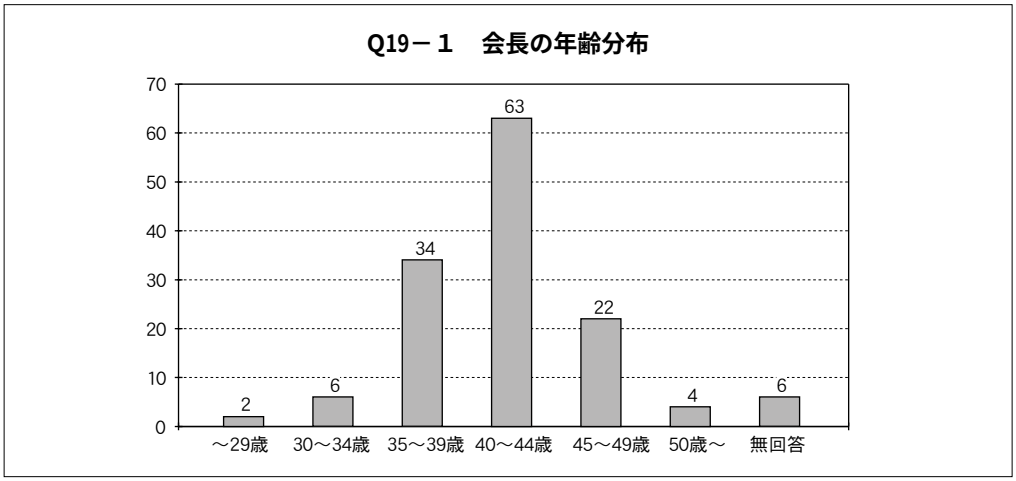


最近子どもが犯罪の犠牲者になるという、痛ましい事件が頻発している。子どもの安全に対する取り組み状況は「一応取り組んでいる」が最も多く、１０２組織７４％である。「熱心に組んでいる」の１６組織、１２％を加えると、８６％で取り組まれていることになる。「取り組んでいない」という組織は、１９組織１４％であった。



では具体的にはどのような取り組みがなされているかと言えば、「登下校時の通学路での立ち番」が最も多く８７組織、６４％で取り組まれている。登校時交通安全のために立ち番は以前から取り組まれていたが、事件は下校時に起きている場合が多いので、保護者だけでは対応が難しくなっている。ほぼこれと並んで「子ども110番などのセーフハウスの設置」が８５組織、６２％である。３番目が「危険な場所の把握及び子どもに対する注意・対策」で６０組織、４４％、以下「不審者に対する情報の共有」３６組織、２６％、「地域内の見回り」２９組織、２１％である。その他の欄に記載されていたのは、「新一年生のために、４月に毎朝の集団登校」「自治会の方が見回りをしてくださっています」であり、幸か不幸か最近子どもの安全確保に対して、自治会や、老人クラブの協力で地域ぐるみの取り組みになってきている。

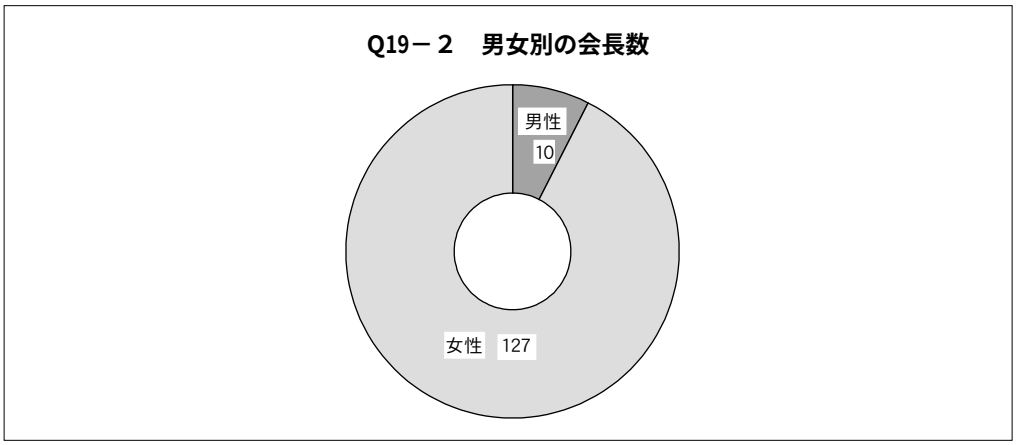
19．子ども会の会長さん像



子ども会活動を中心的に担っている会長さん自身のことについて質問してみた。

まず年齢であるが、40～44歳が最も多く、６３人４８％（ただし年齢を答えたくなかった人を除く）を占める。これに３５～３９歳の３４人２６％、４５～４９歳の２２人１７％が続き、３５～４９歳が９１％を占め、平均年齢を計算すると４１歳になる。おそらく幼児がいなくなり、子どもが小学生以上になる年頃で会長を引き受けているのではないかと思われる。ただ２０代や３０代前半で会長になっている人もいるし、５０歳以上で会長になっている人もいる。子どもは小学生で年齢差は６歳であるが、保護者の会長世代は最も若くて２７歳、最も熟年で５７歳と３０歳も違うのは非常に面白い現象である。会長の年齢が幅広いと言うことは単位の組織の役員レベルでも同様であろう。多様な年代の大人達が関わっていることは、確かに考え方の違いなどで活動がやりにくいというデメリットもあるかも知れないが、むしろ幅広い年齢の人たちが関わるということでプラスに変えられるのではなかろうか。若さと行動力のある人、知識・経験の豊富な人など相互に協力しあえば活動にも幅ができると考える。

19－２　男女別、子どもの数別、会長歴別の会長の構成

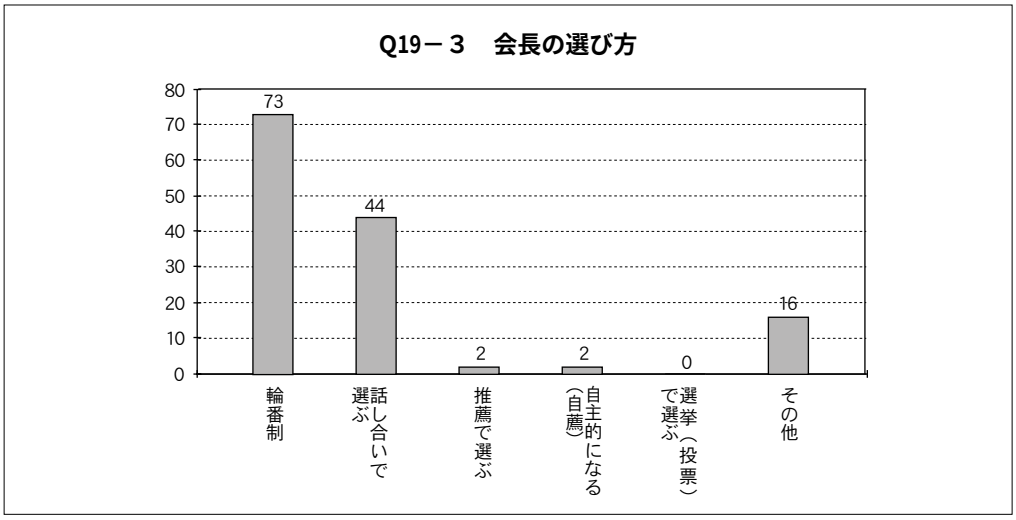


男女別に会長さんを分けると、男性１０人、でわずか７％であり、女性が１２７人９３％と圧倒的である。子ども会の会長さんはまさに女性によって担われていることになる。

また会長さん自身が何人の子どもを育てているのかを尋ねてところ、２人が８０人で５８％を占め、３人が３７人で２７％、１人が１３人で９％、４人が４人で３％、５人と０人（子どもクラブの会員の子どもがいないという意味か？）が１人で１％であった。平均の子ども数はで２.２４人ということになる。もちろんまだ増える可能性はあるが。

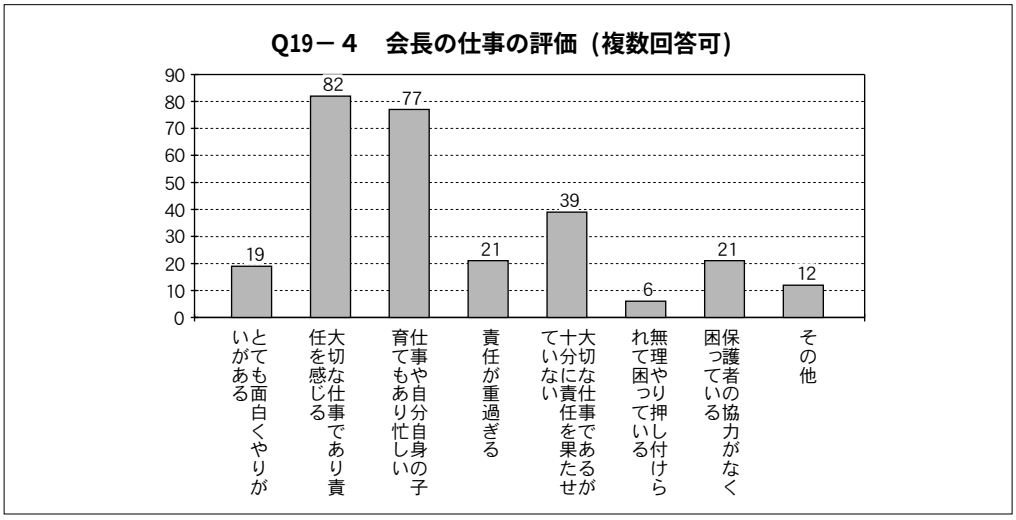
会長歴を尋ねたところ、１年が圧倒的で１３０人、９５％を占めた。２年は５人で４％、３年は１人、８年が１人ということであった。子ども会の会長はほぼ全員が１年交代という形になっている。

19－３　会長の選び方



会長の選び方では、「輪番制」が最も多く７３組織、５３％である。次いで「話し合いで選ぶ」が４４組織３２％、「その他」１６組織、１２％の順になり、推薦で決めたり、自薦でなる人は非常に少ないし、選挙に持ち込まれるのは皆無という状況である。その他が多いのも選出の難しさを表している。６年生の保護者の中から選ばれるのが多いのではないかと考えるが、任期が１年であることを考えれば役員が全員１年で交代することになり、活動の継続性を考えると問題である。会長は６年生の保護者、副会長は５年生の保護者で次年度会長というような選び方をすれば組織や活動の継続性が保たれるのではなかろうか。あるいは、思い切って低学年の保護者にも役員を頼むことを考えいい。やりたい人にやってもらうことが一番である。１年交代の場合は特に工夫が必要である。その中でわずかではあるが、３年、８年と会長を継続している人が見られた。子どもが好きで、子ども会活動に自分の力を注ぎたいという人は貴重な存在であり、大いに活躍してもらっていい。それは少年野球などのボランティア監督と同様である。地域の自治会組織の中で、子ども会活動を保護者と子どもだけの活動に限るのではなく、子ども達の育成を地域ぐるみで支援するために、持続的に活動を指導する担当者を決めて運営する体制を作ることも考えられる方法である。

19－４　会長の仕事の自己評価



大変忙しい中で頑張っている会長さん達が、自分の会長としての仕事をどう評価しているのか尋ねてみた。最も多かったのは「大切な仕事であり責任を感じる」で８２人、６０％である。これにほぼ肩を並べて「仕事や自分自身の子育てもあり忙しい」が７７人、５６％である。このように会長さんの多くが責任を感じつつ、忙しい中で懸命に頑張っている姿が目に浮かぶ。そして「大切な仕事であるが十分に責任を果たせていない」と考えている人が３９人、２８％存在している。また「責任が重すぎる」と「保護者の協力がなく困っている」がともに２１人、１６％存在している。「とても面白くやりがいがある」と、生き生きと積極的に活動している人は１９人、１４％である。確かにいろいろ大変な面もあろうが、できるだけ前向きに考えて行動するこういう人たちの存在は貴重であり、子どもを育てる楽しさ、面白さ、生き甲斐をもっと多くの人が感じるような活動を展開することが必要であろう。

20．子ども会活動に対する意見・要望

最後の質問は「子ども会活動に対するご意見や要望がありましたら自由にお書きください。」ということであった。

この自由記述欄に、実にたくさんの会長さん、特にお母さん会長さんの意見が寄せられた。ここにその子ども会活動に対する生の声をできるかぎり掲載することにした。現在の子ども会活動の悩み、問題点、期待、改善方向など、活動体験から出てきた生々しい意見が寄せられている。

（１）最近は、小学高学年ともなると、スポーツ少年団、学習塾など休日に子ども会活動に参加できない子ども達が増加しています。リーダーとして、低学年をまとめる高学年が参加できず困っています。

（２）予算も少なく、公的助成があればもっと積極的な活動もできるのではないかと思います。

（３）なくてはならない存在ですが、大人が手を出しすぎるかなぁ～と思います。

（４）自治体が子ども会に対する企画やお金を出してほしい。

（５）子ども会役員の研修・勉強会をしてほしい。活発に活動している団体の表彰など。

（６）自分の子どももそうですが、最近はスポーツクラブに入っている子が多く、子ども会の行事とかと重なると、どうしてもクラブのほうを取ってしまうのが残念です。
（７）私が小学生のことは、子どもの人数も多く、子供会活動も活発であったように感じます。今でも、そのころのように、歓送迎会やクリスマス会などを実施したいのですが、塾やスポーツ少年団で参加できない子ども達が増えていてなかなか行えないでいます。５、６年生の不参加が目立ちます。
（８）子ども会活動を行うにあたって、必ず会長・副会長、他役員それぞれの方が多忙にされています。一年間本当にお疲れ様でしたという言葉でしか感謝の気持ちを表すことができません。一年間、しっかりと会長された方などに、お礼として、何か品物でも、差し上げたらいいのにと思います、その費用などは子ども会費のわずかな金額で、お礼の品を差し上げる様にしたらどうでしょうか？
（９）子どもが忙しすぎて行事に参加したくても時間的にできない状態にある。子どもに地域の楽しかった思い出を残してあげたいと思う。
(10) 活動に無関心な保護者が増えてきていて、協力が得られにくい情況になってきていると思います。
(11) 改まった行事ではなく、保護者が子ども達と触れ合いながらやれたらいいなーと思う．公園などで、ボール遊びなど。
(12)「宮崎市子ども会活動活性化事業」で、申し込みされた子ども会に年５万円、補助されるが、一度決定した子ども会は次年度から申し込みできないというのがあるが、仕事と兼ねて，申込書を書く余裕もなく、金額が減ってもいいから、全子ども会に援助が届く方法がもっとあるといいと思う。
(13) 子ども会に入らない家庭もあり子どもが減少している。
(14) 役員の負担も多く大変だ。
(15) 年々、子ども会に参加する人が減って、うちの子供会は、再来年くらいにはなくなりそうです。いろんな方を誘って入ってもらったほうがいいと思うのですが、いろんな保護者がいて（うちも前に大きなトラブルがありました）いやな思いをするより、今の会員さん達で楽しくやる方がいいということで今のままでいます。子供だけが人間関係が悪いのではなく、大人でもうまく人付き合いの出来ない人も多くなってきているのが、子ども会活動が活発でなくなる理由の一つだと思います。
(16) 保護者のリードの下、準備されたイベントに子どもが参加しているのが実情。子ども達の自主的な活動を手助けするという本来の姿はない。実際、少年団や塾など、高学年になればなる程参加できない情況で疑問が残ります。
(17) 市街地の子ども会で、近くには新しいマンションが次々と建設されています。ご近所での子ども同士が仲良くなり、子どもの顔を近所の方が覚えてくださることが子どもの安全保護につながるものと思っています。出来るだけ子ども会に多くの子どもが参加して名前と顔を近所の子どもや大人に覚えてもらえるようにしたいです、小さい頃からスポーツ少年団に入り、土日も練習や試合で忙しく、子ども会への参加が難しくなってきているようです。
(18) 子ども会は、あったほうがいいとは思うのですが、行事の数が多すぎて、学校側から地区に下ろすことが多く、会長の負担は重いです。

(19) 子どもの参加も、余り多くないのに、段取りはハードで、仕事も持ちながら、この役をやるというのは大変です。
(20) 昔はこうじゃなかったと、親からきく度に、今は、子ども会の重要性が問われていると思います。塾や習いこと、スポーツなど、そちらを優先させているのが現状で、子ども会の行事をどれだけの子が楽しみにしているのでしょうか？
(21) リーダーシップのある保護者が少なくなった。
(22) 家族の時間も余り作れない家庭が増え、子ども会の活動も余り積極的に参加できにくくなっている。
(23) 子ども会でありながら親が計画し、子どもは仕方なく参加している。やってみればそこそこ楽しいが人数が少なく特に親しい人がいるわけではない、学校行事で横のつながりはあるし、楽しんでいるが、子ども会となるとやらねばならない行事でしかないような感じがします。
(24) 子ども会という形がまだありません。地区委員として、前の方がやっていた行事をまねて行っています。主に給食費集めをやっています。子ども会費ではなく、班費の方から、話し合いの下、使わせていただくこともありました。
(25) 子ども会の存在意義自体の問われていると思います。既存の柔軟な団体の性格を活かして、失われつつある地域性、子ども縦のつながりなど、持ち続けてほしいところです。強制されているように感じている保護者が多いことも事実です。
(26) 去年の活動が地味だったため、４月の歓迎会で予算を多めに使い参加した子ども達に楽しいという印象を与えると、次からの参加率も去年の２倍近くになった、市の助成金も交付されたお陰で、毎回中味のあるイベントを行えています。もう１回は３世代交流としてせっかく近くなので、宮大の学生の方々と何かイベントをやりたいなぁと思います。
(27)「子どもの成長を考えた子どものための活動を」と思っていても、子どもにうまく働きかけられず、行事はどんどん迫ってくるので、ついつい大人が企画してやってしまうという感じです。これではいけないなぁと反省してみるものの始めての育成会長であり、かつ１年交代なので、みんな１年を何とかこなせればいいかなと消極的です。やりがいはあるが、２年続けてとはとても思えません。
(28) 子ども達は、子ども会へ参加するのは「遊べるから」だと思う。実際、子ども会では、自主的に清掃とかしてないので、責任感とかはないと思う。昨年の会長さんがしていたことをこなすことで精一杯でした。会長として、いろんな人と知り合いになれてよかったです。私達の子どもの時を思い出しても「楽しく遊べた」くらいだったと思うから、自覚を持ってとか難しいと思う。今後子ども達が集まるときに、自主性を持つようにいってみようと思います。
(29) 今、このような世の中で、子どもを取り巻く環境はとても危険なものになっていると思います。自分の子どもは、自分で守るこのごろになっている中で、子ども会の役割はとても重要だと思います。
(30) 既存の行事に、年に何度も参加を迫られるのはとても大変です。マンネリで親も子も疲れてしまうことが多いです。また、子ども会の役員になると、夜の集まりが大変多く、自分の家庭の団欒が非常に少なくなり、つらい思いをしています。皆さん公私共に忙しい毎日なのだから、このようなやり方では、役員になりたがらない人が多いのは当然だ

と思います。

(31) 最近は母子家庭の家も多く、母親が子ども会の役員が出来ないからと子ども会に入らない家庭も多い。親が役員になりたくないからという意見もあるが、子どもは子ども会行事に参加できないのがかわいそう。子ども会に入って他の学年の子ども達と仲良くなり、いいことがたくさんあるのに、それをわかってもらえない。強制ではないので、なかなか、うまくいかないところがある。

(32) 今、子どもの数が年々少なくなってきていて、子ども会費がどうしても上がっていっていて、負担が多い、市子連、県子連のあり方自体に問題があると思う。このままでは、子ども会そのものをなくし、地域で別の取り組みをしたほうがいいと思う。

(33) 親が決めたことに対し、子どもが動くという、あまり子ども主体ではなかった会を今年１年だけは少しでも変えようと思い、行事前には、６年生の話し合い、保護者の役員会などを何度か入れていきました。実際子ども達は、思った以上に活動に積極的で、かかわりを持とうという気持ちが、あったような印象を持ちました。私の子どもは、今年で下の子が小学校を卒業するので、今後はどういう形になっていくかはわかりませんが、子ども会とはという問いかけが改めて大事なような気がしてなりません。

(34) 子ども会の行事の企画・運営にもう少し子ども達を関わらせたいと思っていたが、集めて検討するには親も子ども時間を取ることが難しかった。行事自体を行うときは６年生が下の子ども達の世話をよくしてくれていたので、下の学年の子ども達を引っ張る力はあると思った。

(35) 共働き家庭が多いので、役員をすることがとても負担になるが、今は、地域や家庭が子ども達を守り、育てる時代になってきているので、子ども会活動はぜひ必要です。役員も保護者も、余り負担にならないところでの行事の見直し、他地区との行事の合併なども検討していく予定です。

(36) 例年の活動をもとに子ども会の行事に参加しています。どうしても土、日の行事が多くで参加できない子も多いです。地区の子、保護者でも知らない人も多いです、なかなか皆さん忙しく、お付き合いが難しい時代のような気がします。しかし、役員同志は楽しく協力し合って、とても楽しく感謝していていい経験になっています。

(37) 会長になって初めて、過去、子ども会に対し、非協力的であったと反省しています。６年生の親ですが、塾や習いことの送迎などで、夜の集会なども高学年の方が忙しいような気がします。低学年で班長などを経験し、中学年で役員をしていただくのがよいのではと考えました。そのほうが親も早く子ども会になじめ、協力性も出てくるのではないのでしょうか。子ども達は、参加したいけど、親が面倒くさいから、子どもが参加できない。そういう雰囲気が感じられます。

(38) 私達の子ども会では６年の保護者が役員となることになっており、その中で、分担が決まります。そして、協力し合って１年間子ども会を運営することになります。その中で、保護者同士のつながりも深まり仲良くなっていくのですが、責任を持って参加される方と自分のことだけを義務的にされて、後は知らんふりの人との差が見られます。何もしない人もいます。仕方がないので、出来るもの同士が時間を作って、何とか進めていくことになります。結局は忙しいという人が、無理しながら取りくんでいる情況です。やってみれば、大人同士の人間関係も出来、結構楽しく勉強にもなるものです。自分自身と

してはこれでよいのですが、会のことは何もせずに子どもは預けっぱなしというそう人いう方ももっと協力してほしいというのが多少の不満でもあります。結局はボランティアなのですから強制は出来ないわけですが「自分の子どもが世話になっているのですから自分も何かしよう」という気持ちが欠けている人が増えてきているような気がします。

(39) 価値観の多様化により、行事の選択に迷うときがあります。伝統文化を大切にしていきたい気持ちがある一方、転勤族にとっては他人ことのようで意見はまとまらず。自身でも必要ないのでは？という行事があり、疑問を持ちながら一応例年通りの形を取っている。

むすび

１．子ども会活動の課題

今回の子ども会活動のアンケート調査では、地域コミュニティと子育てということに関して貴重なデータが得られた。この調査によって子ども会活動の現状がほぼ把握され、問題点と課題が明らかになった。少子・高齢社会はマイナス面ばかりではない。悲観的になり、ぼやいてばかりいても何にも解決しない。もっと積極的に対応して行くことが必要である。

学校週休２日制が定着してから、休日の子ども達へのメニューが色々出されてきた。しかし、どうもそのメニューの調整がうまくいっていないのではないかと思われる。子ども会の活動も、そのメニューの氾濫の中で苦労している。特に小学校高学年のメニューの多様化は、子ども達を子ども会活動から引き離している。塾とスポーツクラブが、子ども会との競合関係にある。地域の中でこのメニューの競合を整理する必要がある。

特に現在の子ども会活動はお母さんと低学年の子ども達の活動が中心になっている。高学年の子ども達にリーダーシップを発揮させるためには、きちんと活動に参加させる手だてを講じなければならない。少子化社会の中では異年齢の子ども同士の交流は極めて重要であり、地域社会の中で話し合い活動の競合を避けるような努力が必要である。

このように子ども会活動を地域コミュニティ活動の一環として位置づけ、それに対するの、人的、経済的支援体制をもっと真剣に考えて行く必要がある。地域コミュニティの特徴は老若男女というあらゆる年齢層の人々で構成されていることである。それぞれに応じた働きによってコミュニティとしての機能が発揮される。

かつての子ども達は、親にたっぷり愛情を注がれたから、ちゃんと育ったのではない。直接自分の親から育てられなくても、山学校や川学校の自然の中で逞しく遊び、地域の子ども達と群の中で切磋琢磨されて成長し、また地域の大人達と接触しその影響を受けて成長する環境があった。家族の中でも祖父母や、兄弟姉妹が豊富にいた。子どもは自動成長システムの中で育っていたといって良い。この頃の子ども会活動は、子ども達だけでやることができた。

都市化、核家族化の中でその自動成長システムが壊れた。子育てのために別のシステムを確立しなければならない。その１つが子育ての外部化・経済化である。子育てにお金がかかるようになった。合計特殊出生率が1.26にまで落ちたのは、それだけ子どもを育てしにくい社会になったということである。地域の子育て機能も、自然には発揮されない社会になり、意識的に取り組まなければならなくなった。

家族と地域と学校が子どもの育つ環境である。この３つの内、学校は「有償労働」の世界で

あるが、残りは「無償労働」の世界である。全てを「有償労働」にできなのならばそのことにしっかり目配せした対策が必要である。「無償労働」への支援をもっと社会的に考えるべきである。

最近、各地で「子ども基金」が作られるようになった。自治体が一定の財源を支出し、住民や企業が寄付を出して、子どもの為に活動する市民団体へ助成を出すというやり方である。自治体も財源不足であり、出せるお金も限られているが、未来を担う子どものための出資は何にもまして優先すべきである。そして少子化による地域社会の将来を憂う市民や企業も積極的に寄付を出すはずである。「無償労働」としての子育てにはボランティア的協力が必要なのである。それができない地域は、益々子育てがしにくくなり、少子化・人口減少が進むことになる。まさに、地域的取り組みが必要なのである。お金にあまり期待できないだけに、知恵と労力を出さなければならない。

２．現代社会と子育て問題－子ども会活動の背景－

次世代を再生産するというもともと「無償労働」の子育てに莫大なお金がかかるようになったということは、マイナスの経済活動を行うということである。つまり「子育て」とは現代社会の最大のボランティア活動ということになる。

経済社会の発展は、人間社会に必要な仕事を「有償労働」と「無償労働」に分割し、さらに「有償労働」優位の構造を深化させてきた。我が国でも高度成長過程で普遍化した性別役割分業「男は仕事、女は家庭」という核家族システムは、男から子どもを奪い、女から仕事を奪った。家事・育児という「無償労働」は女の仕事として見なされるようになったのである。この性別役割分業によって厳しい社会の荒波の中で働く男は「強く、逞しく、経済的責任」がなければならず、家庭で夫や子どもをケアーする女は「優しく、素直で、献身的」でなければならないという社会的・文化的性差の意識が普遍化した。まさに地位が性格を規定して来たのである。「優しい男」は男らしくなく、「強い女」は女らしくないという文化が一般化した。

しかし、社会は大きく変わり、性別役割分業でやれるのはごく一部の人しかいなくなった。女性達も経済的自立を目指すようになり、社会的にもその条件が整えられてきた。結婚後ずっと「専業主婦」のままで生きていける人は、一部の裕福な家庭に限られてきた。しかし、社会は大きく変わっても、人々の意識はなかなか変わらない。特に他の先進諸国に比べ日本の性別役割分業の固定観念は、稀にみる強固さであり、極めてゆっくりとしか意識は変わってきていない。この矛盾が現代の、子育てを巡る困難として現れている。

「有償労働」優位、あるいは「有償労働」しか社会的に評価しないという考え方で突き進めば、誰も子育てはしなくなる。もっとも典型的な「無償労働」が「子育て」だからである。次世代をきちんと再生産することが、人類としての務めである。先祖代々受け継いできた命を、次世代に伝えることは当然のことである。私は日頃から、「人間にとって子育て以上に大切な仕事はない」と明言している。

以前は誰も子育てを「労働」や「仕事」と意識しないで、当然のこととして行ってきたはずである。子育てによる、肉体的、精神的、そして経済的苦労は、「世代順送りの苦労」(親の苦労を子で返す) であり当たり前のこととしてやってきた。しかし、「有償労働」優位指向が高まってきた現在、また「子どもの社会化」に莫大な経費が必要になった現在、子育てに経済的計算の思考が入り込んできた。子ども１人育てるのに数千万円とか、結婚して出産して仕事を

止めると、生涯賃金を何億円失うとか。社会の存続に必要な子育てを「有償労働」にして問題が解決するならば思い切って、徹底的に「有償評価」すればいい。しかし、現在の月５千円の児童手当は、有償化するという考えに立っているとはとてもいえない。少子化を止めることを真剣に考えるならば、思い切っ施策を打たなければならないだろう。しかし、経済的支援だけで子ども達が健全に育つわけではない。子どもに注がれる愛情をお金には換算できない。

格差社会という言葉がよく使われるようになったが、その最も大きな問題は親の経済力が子育てに影響を与えるようになったこと、つまり子ども達にとっての人生のチャンスの不平等が拡大していることである。近年国立大学医学部に公立の高校からは進学することが非常に難しくなっているという。国立大医学部進学者のほとんどが中高一貫の私立高校からの進学者に占められるようになってしまっている。子育ても、教育投資という見方で考えられるようになってしまった。多分、医学部進学者の彼らは地域社会、コミュニティの中で育つことはほとんどなかったであろう。子ども同士の触れ合い、またお年寄りや親世代の大人達との触れあいをどれ程経験しただろうか。小学校の時から塾通いと受験勉強で過ごしたはずである。そのような育ち方では地域の中で子ども同士触れあい、大人達、高齢者との触れあいを通じて形成されるコミュニケーション力、社会力を身につけることはほとんどできない。子ども会活動と無縁で育った子ども達の行く末が気になる。ライブドア事件に象徴されるように、お金儲けの為に生きる、お金儲けが人生の目標になる生き方は人間を破壊する。あくまでもお金は、目的ではなく生きていくための手段に過ぎない。愛する人を持ち、多くの友人や仲間を得て、その良い人間関係を中で精神的に充実した幸せな人間生活を送ることが人生の目標ではないだろうか。幸せはお金にではなく、良い人間関係と精神的充実感の中にある。子どもが豊かな感性と暖かい心を持ち、人間性にあふれた大人に成長すること、子ども会活動の本当の目的はそこにあるのではなかろうか。

参考文献

門脇厚司『子どもの社会力』岩波新書　1999年
倉沢　進『コミュニティ論』放送大学教育振興会　2002年
山崎丈夫『地域コミュニティ論』自治体研究社　2003年
小谷敏編『子ども論を読む』世界思想社　2003年
山田昌弘『希望格差社会』筑摩書房　2004年
川端裕人、岸裕司、汐見稔幸『パパ権宣言』大月書店2006年
子ども会学会「子ども会活動の科学化を求めて」2006年